

地域おこし協力隊 活動記 Vol.116

まさにエクストリームウェザーの時代を象徴する1年です。冬は観測史上最深を記録するほどの大雪。夏は真夏日が史上最多となる暑い日のオンパレード。かと思えば、ゲリラ豪雨のような大雨やりんごが落下するほどの突風が吹いたり、弘前を含む津軽地方は極端な気象に大変振り回されました。

それでも9月下旬からはようやく秋らしくなりはじめ、朝晩は暖房が恋しくなるような日もあります。わたし（加賀）の家の周りでもトンボがたくさん飛び回っていますが、過ごしやすい日々もおそらく駆け足で過ぎ去っていくことでしょう。

そんな短い秋を惜しむかのように、9月21日（日）にはお山参詣の宵山が行われ、協力隊も参加してきました。詳細は次号の穂坂隊員の記事に譲りますが、今年は地域の小中学生のほか、青森大学や明治大学の学生さんも参加し、例年より若い顔が多く見られました。

秋の風物詩といわれるお山参詣も、現在は気候変動の影響で夏のような気候の下で行われることが多くなっています。今年も、ときおりスコールのような雨に見舞われながらの参詣となりました。それでも参列者は、登山囃子の独特な音楽に後押しされ、心躍らせながら参道を練

り歩いたのではないのでしょうか。

人の心を動かす大きなもののひとつが、音楽ではないでしょうか。日付けは遡りますが、9月16日（火）には、総合老人福祉施設「長慶苑」で歌声を披露してきました。敬老の会のイベントとして行われたこの催しでは、相馬の歌唱王、五所町会長の山内秀樹さんや、相馬の歌姫の小学生二人、そして飛び入り参加の中学生3人とその母上が美声を披露（わたしも少し）。もちろんクオリティはプロの歌手にはかないませんが、お年寄りの方々が楽しそうに手拍子しながら聴いてくだ

さり、おそらく初めてこれほど大勢の前で唄った子どもたちも、とても楽しかったのではないかと思います。やるほうも聴くほうも心が大きく動かされる——それが音楽の持つ最大の魅力なのではないでしょうか。

津軽を扱った歌には寒さや雪を題材にしたものが多いようですが、厳しい冬を乗り越えようとする人々には、そんな音楽も心を支えるもののひとつなのかもしれません。今度やって来る冬はどんな歌が似合う冬になるのでしょうか。



9月21日に行われたお山参詣宵山の出発直前。全員で神様に安全な参詣を祈りました



長慶苑で催された歌唱会の様子。職員の皆さんもおおいに盛り上げてくださり、子どもたちも楽しそうでした

